

◆豆子名誉会長「書道あれこれ」



つての誤りもあつてはならない。法を外してはならないのだ。展覧会審査は、それを基準にして鑑別せねばならぬので大変だ。

▼点は天、線(画)は地。王羲之の優れたところを端的にいうと、線から面に移つたと解釈する。線と面との違い。線が稲妻のように細いかと思うと面は幅広くきて、その筆使いは今までの書法と違い独特だ。そもそも書道というものは筆の通つた跡を眺める技だと思う。いかに紙の上を筆が走つたか、その跡を鑑賞するのである。一本の線にも色々な変化が生まれている。それが本当の書道だ。

▼もう一つ「気」というものが中国では早くから重要視され、これは目に見えないが、いわば物質の元を表す。人間は気を吸って吐いているが、書にも呼吸がある。これが解らぬ者は書が解らぬ。書にも吸う息吐く息があつて、それが書を生かしているのだ。

▼気の不思議は一番大切な事。大池先生曰く、まず何といても自分が観えている書の良し悪しが解つてこそ、そこまでの書が書ける。観える力⇨鑑識眼。これが最も大切だ。人の書を観て心を打たれ立ち尽くした体験がある人ならば必ずそこまではい

ける筈という事だ。私は心眼を開ける、眼力を養う為に古い作品を求めた。自分がどうしても手に入れたい魅力を感じて、求めることだ。

▼極論するとこの点と画が上手く書けたら、理屈で言えば書も上手く書けることになる。それ位大切だから私の新道書道会ではまず基本点画から入る。線には直線と曲線がある。漢字は直線、日本のいろはは曲線。子供達にどちらから教えるべきか、それによつて書道は大きく変わるが、私の所では直線・漢字から行つていく。点画の基本ができれば曲線。意見の色々あるところであるが…

▼墨象など文字性を越えた絵画的なものもあるが、私は漢字以外、自分の思想・意志を子孫に残す事は出来ない、漢字あつてこそと思うのだが…

いづれにしても、書道とは筆の通つた跡を鑑賞する技と前述したが、使うのは水だ。水によつて滲み・かすれなど漢字に奥深く味付けをする。書は味の芸術・奥深さの芸術だ。

▼「無」と違い「死」という文字は人を惹きつけ迫ってくる力がある。この様にその力が文字によつて違う。漢字は奥が深い。

▼書家とは書をもつて世に立つ者という。自分の字を書いて職業としていくのだ。書道家は書道界の為に活躍している人。

▼書の本当の価値は、前述したように筆の通つた跡を眺める訳だから線質ということだ。「書譜」の中に、「古は質にして今は妍なり」とある。古は東晋・王羲之、今は唐代・孫過庭。唐代、書は美しくはなつたが質は悪いと孫は見抜いていたわけだ。質の説明は非常に難しい。

▼空海は日本で書聖とされているが、中国から持ち帰つた震旦書法字典の中に、当時考えられていた宇宙の説が書道の大元の姿だと、驚くべき事にあのアインシュタイン理論に全く似た説を根本原理に使つていた事実がある。蔡邕の理論、点⇨天⇨星の繋がりが線(画)⇨地で、トン、ツ、トン。トンの打ち込みが出生を表しツイが人生、トンが死。起筆・送筆・終筆の三つの成り立ち、すべて三折法から成る原点である。

▼人間は何が為に生まれてきたか。三木清など有名な人の人生論もよく読んだが、九十二歳になつても未だわからぬところがある。

▼書家は何をしに生まれてきたか。できるだけ高く買って貰える書を書くのが一番、一枚売れて半年くらい過ごせたらいい(笑)。明治、大正の頃は書を解する人が多かつた。そろそろ時間だ。(ホームページ掲載予定)

(5) 書道とは漢字を書く技のことをいう。漢字は黄河流域の民族によって出来、韓国を通じて伝わつたが、漢字が誕生して初めて人間は意志の伝達を後世に残す事が出来る様になつた。初めは僅かな漢字が、文化の発達と共に増えて、明時代にできた「康熙字典」では何十万という数の多さになつた。そしてこれが今一番大きな漢字字典といわれている。漢字は字数は増えているが、書法として残つている原点は、後漢の蔡邕という書家が考えたもので、いわゆる蔡邕理論が今日まで鉄則とされているのである。漢字の原則というのは極めてうまく造つてあり、書法というものもそれに則つて点と線(画)という二つの要素から成り立つて、他に一切ない。これをどう組み合わせるかで漢字は成っている。芸術という中で書道は一番制約が多い。本来漢字を書く技として発達してきたので一